



地域支援員（吉和地域担当）
よしどみ・ゆみ
吉富 有美さん
(33歳・花原)

Profile
阿品台出身。青年海外協力隊員として2年間フィジーに滞在し、地域のごみ問題に貢献。平成23年8月から地域支援員として吉和地域を担当。

胸を張って「帰っておいで」と、言える地域力が、ここにはあります

交通手段や病院、買い物などを例にとると、吉和地域は不便だとよく言われますが、それは今に始まったことではなく、昔からそうだったこと。よその地域と比べるからそう見えるのであって、吉和に住んでいる人たちはみんな、助け合いながら幸せに満たされた暮らしを営んでいると感じています。

「地域力」というのは、住んでいる人たちが地域に誇りを持ち、活気に満ちて暮らしているかどうかの物差しではないでしょうか。

人口減少が引き起こす問題は、決して小さいものではありません。しかし、そのことによって、元氣になれない感情が表に出てくることの方が怖いと思っています。3年間の活動の中で気を付けたこ

とは、そういった閉塞感を生み出さないようにすることです。

吉和で暮らす子どもたちは、中学卒業を機にほとんどの人が親元を離れます。そんな子どもたちに「いったんはここを出ても、いつかは帰っておいで」と胸を張って自分の地域を誇れる「地域力」がここにはあります。

吉和地域の約30軒が自宅を開放する「おさんぼギャラリー」が3年目を迎えました。今後は、今の形をプラットフォームに、さまざまな人が自由にいろんな形で関わることができたらいいなと思います。

吉和の人口は少ないですが、私の人生の中で一番知人の多い場所となりました。今後も一住民の視点を持って吉和を盛り上げていきたいと思っています。



写真右_10月に開催された「吉和おさんぼギャラリー」。地域支援員の吉富さんたち実行委員が企画・運営。写真左_元保育士の経験を生かした、子育てイベントにも積極的に参加する地域支援員の早川さん。

帰りたくなる、人が来たくなる、そんな地域になるには何が必要なのか—



地域支援員（佐伯地域担当）
はやかわ・さちえ
早川 幸江さん
(42歳・宮島口)

Profile
東京都出身。東京で保育士の経験を生かした活動を展開。平成25年10月廿日市市に移住し、地域支援員として佐伯地域を担当。

まずは楽しく話せる空間づくりから。そこから、何かが生まれると思っています—

佐伯は地域も広く、移動にはどうしても車が必要です。そのせいなのか、人が交流するイベントはあるけれど、普段何気なく人と人がすれ違う場所が意外と少ないことに気が付きました。

意識せずにあいさつをしたり、立ち止まって話をしたり、そんな場所が必要なのかなと感じています。

そんな中、6月から老若男女誰でも参加でき、佐伯のことを話し合う「佐伯まちづくりミーティング」を始めました。

毎月第2金曜日18時30分から佐伯支所3階で行っていますが、参加することが苦痛にならないよう、出欠は取らないようにしています。

毎回テーマを決め、観光・雇用など佐伯地域が抱える問題について意見を出し

合っています。もちろん、夢のような話もありますが、実現可能な案もいくつかすでに出されています。

「あそこに行けば誰かがいる。みんなが集まっているから行ってみよう。よく分からないけど楽しそうだ」そんな場所になったらいいなと思っています。

佐伯地域に携わって1年が経ちましたが、「地域の活動の手助けがしたい」という思いは変わっていません。

実は、素晴らしい地域資源は、あちこちに転がっているものなんです。しかし、あまりにも当たり前前に地域にありすぎて、地元の人からは意外と見落とされがちです。外から見た地域の輝いている部分を掘り起し、地域が輝くお手伝いができたらと思っています。



地域支援員（浅原地区担当）
よこい・みな
横井 美奈さん
(44歳・浅原)

Profile
田舎での生活に憧れ、3年前に坂町から浅原に移住。夫の潤司さんとともに地域活性型のまつり「浅原楽市楽座」を昨年開催し、地域おこしに汗を流す。9月から地域支援員として浅原市民センターを拠点に活動。

都会の人が憧れる地域に—

9月から、新しく佐伯・浅原地区の地域支援員として移住して3年目の横井美奈さんが配置された。地域を輝かせるためには何が必要なのか、現在活動中の地域支援員の皆さんにその思いを聞いた—。

地域支援員

人口の流出などにより、人口減少が著しい過疎地域などに派遣。任期は3年で、地域のニーズを拾い上げ、課題解決や維持・活性化に向け活動している。

「『岩船の水』のおいしさが移住のきっかけでした」。そう語るのは、横井美奈さん。3年前、浅原に家族と共に移住し、現在は浅原市民センターで地域支援員として活動している。

以前から水をくみにきていた横井さんは趣味を通じて浅原の人と知り合い、家を借りることができたとのこと。休日には畑仕事にも汗を流す。

「浅原に温かく迎え入れていただいていた感謝の言葉しかありません。今まで農業の経験はなかったのですが、多くの方に支えられながら取り組んでいます。手入れが行き届かず、周りの方にご迷惑をお掛けしているのが現状です」。

周りの人の勧めもあって「尊敬できる人が身近にたくさんいるこの浅原の力になりたい」と支援員の応募を決意した。

また、昨年「浅原楽市楽座」を開催し、地域の魅力発信にも尽力。「特に気負ったわけではなく、もともとは浅原に住む音楽好きな人が集まって何かできないかと思っていたところ、さまざまな団体の方がバックアップしてくださった結果、地域のお祭りみたいになりました」と笑顔で話す。

「人口減少、少子高齢化が進



10月12日に行われた浅原・龜山神社の秋まつり。横井さんも参加してまつりを盛り上げた。

む中、浅原小学校の閉校が決まりました。しかし、浅原はコミュニティの完成度が高く、誰もが地域のためにと目いっぱい頑張っています。支援員として何ができるのか地域の皆さんと知恵を出し合いながら考えていきたいと思っています」。

「田舎に住む人が都会に憧れるように、都会に住む人が田舎に憧れることは自然なことなんです。何より、実際に住みたいと思っている人もたくさんいます。今、必要なことはそういった住みたい人と地域のマッチングなんです」。

定住者を増やすため、広報紙の作成など情報発信にも力を入れたと話す横井さん。

「住んでみて浅原の素晴らしさを実感しています。今後は何が 필요한のか、何をすればいいのかを地域の人たちと考え、都会の人が憧れるような浅原を一緒に作り上げていきたいと思っています」。